2023 年度 福祉助成金（研究助成）完了報告書　提出用

公益財団法人 橋本財団
理事長 橋本 俊明 様

2023 年　5 月　31 日

ふりがな	とよはしぎじゅつかがくだいがく			
大学 研究機関名	豊橋技術科学大学			
代表者名	役職名	助教	氏名	パクミンジョン
連絡先	住所	愛知県豊橋市雲雀ヶ丘 1-1		
	TEL	(0532)44-6834		
	E-mail	mjpark@ace.tut.ac.jp		
	URL	-		
助成額	1,600,000 円			
研究要旨	ハンセン病は神経の麻痺、顔や手足の変形、失明などの症状を伴う感染症で、日本では 1996 年に「らい予防法」が廃止されるまで隔離の対象とされた。その政策を支えたのは、今も全国に 13 か所残されている国立療養所である。治療法が確立され、事実上ハンセン病患者がいなくなった後もハンセン病療養所として運営され続けている背景には、療養所以外に居場所がなくなってしまった入所者の存在がある。かつては 13,000 人を超える人々が暮らしていた療養所だが、今では平均年齢が 87 歳を超え、空家対策に追われる限界集落と化しており、ハンセン病療養所という施設区分を除けば過疎化が進む地方集落のひとつである。 そこで、医療施設ではなく居住施設としてのハンセン病療養所の機能に着目し、社会背景やライフスタイルの変化に対応してきた療養所内の住宅計画の変遷について調査を行った。1909 年に最初の公立療養所が設置されてから今日に至るまでの住宅整備状況と居住環境に関する資料を収集し、療養所内外との比較を通してひとつの集落としての療養所と住み手の関係について考察するとともにそれぞれの特徴について明らかにした。			
研究の目的	今日のハンセン病療養所に暮らすのはハンセン病の後遺症による障害を抱えた後期高齢者達である。平均年齢 87 歳を超え、過疎化が進む療養所は、療養所という施設区分を除けば今日の社会問題を映し出しているという点が本研究の着眼点である。宅地の拡張と縮小、高齢化、空家の増加、都市機能集約など、ハンセン病療養所は超高齢社会の先端にあると捉え、人々の生活の根幹である住宅の変遷をたどることにより、今後の社会への知見を得ることができると考えた。 本研究では医療施設としてではなく居住施設としてのハンセン病療養所の機能に注目し、時代とともに変化していく社会背景やライフスタイルに合わせて入所者のニーズに対応してきた住宅計画の変遷を明らかにした。常に弱者であったハンセン病患者らによって開拓されてきた療養所の生活環境とその経緯を明らかにし、建築計画の中に位置づけることは住生活の歴史にとっても重要な意味を持つと考えられる。より良い暮らしを目指した活動を通して、計画における住民の役割を認識し、今後の地域計画の一助となることが期待される。			
研究の 実施方法	新型コロナウイルス感染症の影響により、県外への出張及び学外者との交流に制限があったこと、高齢者施設であるハンセン病療養所が外部からの訪問を制限していたことなどから、文献調査を中心に研究を行った。 全国 13 カ所の国立ハンセン病療養所を対象に、施設概況や整備計画に関する資料、療養所内での生活に関する資料を収集した。国会図書館、国立ハンセン病資料館、長島愛生園の神谷書庫及び図書室を中心に、各療養所が発行した年報や記念誌、機関誌を調査したほか、所在市町村史、入所者の証言集についても対象とした。また、一部の訪問可能な療養所については現地調査も並行して行った。これらの資料をもとに療養所内の住宅整備過程と居住環境の変遷を明らかにし、同時期の国の住宅政策や住宅供給状況をふまえた分析を行った。			
研究の成果	国内のハンセン病療養所の住宅整備過程と居住環境の変遷について、療養所ごとの特徴とその背景にある入所者らの働きが明らかになった。これまでもひとつの療養所を対象とする研究は行われてきたが、全体の特徴をとらえた研究は施設構成や配置に関わるものに限られており、新たな基礎資料として意義がある。13 か所の療養所は同時に設置されたわけではなく、1909 年から 1943 年にかけて順に開設されている。その間、根拠となる法律にも変化があり、これまでも設立時期による特徴は指摘されてきたが、戦後、全国ハンセン病患者協議会が組織されて以降も居住環境や老			

	朽化住宅の整備状況には違いが見られた。限られた予算をどこに配分するかは各療養所にゆだねられており、施設規模や人口構成、周辺環境などの要素が整備の優先順位に影響を与えていると推察される。 　高齢者施設と化した近年では、看取りの場所が大きな課題となっており、住宅そのものだけでなく医療や介護体制を含めた分析が必要であることが明らかになった。今後の課題として療養所内の医療システムと介護サービスに関する調査が必要と考えられる。
研究の成果の公表状況 今後の公表予定について	これまで発表した研究成果は以下のとおりである。現在、研究全体の結果をまとめた論文を執筆しており、日本建築学会計画系論文集に投稿予定である。 【論文】 ・PARK, M. and OTSUKI, T.：The Formation Process and Changes in Patients' Housing in Nagashima-Aiseien, the First National Sanatorium in Japan. International Planning History Society Proceedings, 19th IPHS Conference, City-Space-Transformation. Vol.19(1). pp.477-488. (2022). 【口頭発表】 ・PARK, M.：The Changes and Characteristics of the Treatment Environment of Hansen's Disease Sanatoria in Japan, International Conference of Asian-Pacific Planning Societies 2022(Nagasaki and Online). 2022-8-19. ・パクミンジョン：国立療養所長島愛生園における十坪住宅の登場と患者住宅整備の変遷．日本建築学会大会(北海道)学術講演梗概集(建築計画)．pp.995-996．(2022)．

＊2023 年 5 月 31 日締切です。必要事項を入力のうえ Word ファイルをメールにてご提出ください。